

～潮流を読む～

注目すべきコロナ誘発型産業革命

亜細亜大学 都市創造学部
教授

後藤 康浩



新しい年を迎えた。2020年は世界も日本もコロナウイルス対応に振り回されたが、2021年は反転攻勢、再出発の年である。足下では世界を新しい成長軌道に乗せる技術、産業、商品、ビジネスの芽吹きが見えているからだ。筆者はそれらを頭文字を並べて「ABCDE 革命」と捉えている。特徴的なのはすべて、コロナ感染がきっかけとなって変化が劇的に加速したことである。「コロナ誘発型産業革命」と呼ぶべきかもしれない。

- A : Agriculture (農業・食料)
- B : Biotechnology (生命・生物工学)
- C : Contents (文章・映像・音響など)
- D : Digital Currency (デジタル通貨)
- E : Electric Vehicle (自動運転電気自動車)

当たり前なものばかりだが、ABCDEそれぞれが「将来の可能性」「変化の萌芽」「市場の胎動」といった段階から2021年に大きく進化、膨脹するだろう。

農業は本格的な工業化の時代に突入する。植物工場はもちろんだが、需要が伸び続ける食肉で新しい潮流が本格化する。ビル養豚や人工肉である。2018～19年にアフリカ豚熱で甚大な被害を受けた中国は家畜への感染を防ぐため、専用の高層養豚ビルの建築を全国的に加速している。人工肉は欧米のビーガン向けから健康、安全、環境の観点で評価され本格的な普及段階に入る。

生命工学はコロナワクチン開発のスピードが証明したように遺伝子の解析・操作が一気に進化した。これを契機に他の治療、創薬分野の技術革新も進むだろう。18世紀末の英国人医師 エドワード・ジェンナーの種痘の開発が人類にワクチンをもたらしたように、コロナは生命工学進化の加速のきっかけとなった。

エンターテインメント系コンテンツの市場拡大は「巣籠もり需要」と呼ばれたが、それだけでなく、VR/ARを使った学習、訓練、体験が広がった。大学のオンライン講義は場所を

問わない高度な教育の提供が可能であることを証明した。リアル・スポーツが観客を集めての開催が困難になったことで、e スポーツが市場や競技者、観客などの面で一気に厚みを増し始めた。

デジタル化は企業や行政の DX が進んだのは確かだが、予定より早まった程度。デジタル化における画期的な変化は各国中央銀行がデジタル通貨を実質的に進め始めたことだ。EV は 2020 年に明らかに分水嶺を越え、これから劇的に膨脹、内燃機関の時代を一気に終わらせるだろう。EV と自動運転は両輪となって自動車や物流の変化を加速させる。

ABCDE はいくつかの共通項を備えている。第 1 は、「デジタル技術」が進化を主導している点。中国のビル養豚はもちろん、養鶏なども個体管理を含めたデジタル化と飼料調達・獣医療・出荷・輸送など農業がデジタル・プラットフォームに乗っている。第 2 は、「後発者優位」である。中銀デジタル通貨は中国が先頭を走り、途上国が前向きなのに対し、主要国は及び腰。EV も既に内燃機関で地位を確立した主要国メーカーは出遅れた。大学教育のオンライン化は途上国の向学心のある学生に最大のチャンスを与えている。

コロナウイルスは人類にとって大きな災厄だったが、世界にとって大きな変化の扉だったのかもしれない。2021 年は扉を開き、一步踏み出す年となるだろう。